

商学会賞受賞報告

第8期生 鈴木 もも

◆執筆論文の概要

様々な製品が溢れている豊かな現代社会において、企業は多様化する消費者ニーズに合わせて、自社の製品バリエーションを豊富にしようと試みている。実際、製品バリエーションの豊富さが消費者の選択意思決定に与える正負の影響を指摘した既存研究は幾つか存在する。しかし、既存研究の多くは選択肢数が消費者の選択意思決定に与える影響にのみ焦点を合わせており、選択肢数が同じく豊富でも、選択肢のバラツキが小さい場合と大きい場合で、消費者の選択意思決定に与える影響が異なりうるという点を考慮した研究は存在しない。そこで、本論は、カラーバリエーションを一例として、選択肢のバラツキの大小が消費者の選択意思決定に与える影響の違いを識別することを試みて分析を行った。分散分析の結果は、選択肢のバラツキが大きい場合より、バラツキが小さい場合の方が、消費者が選択に費やす努力量は大きく、かつ、選択の正確性に対する確信度は小さいということを示唆した。この示唆によって、企業が自社の製品バリエーションを増やす際には、ターゲットとする消費者の選好に合わせた、限られた範囲において、製品バリエーションを増やすよりも、ターゲットとする消費者の選好と異なる製品モデルをも加えた、敢えて広い範囲において製品バリエーションを増やす方が、消費者にとって有益な製品バリエーションを展開することができるという含意が得られた。

◆執筆後記

「商学会賞受賞」。このことは私にとってとても大きな意味を持つ。なぜなら、これが私が小野ゼミに入った理由の1つだからだ。2年生の時、三田際で目にした7期インゼミチームの論文「広告音楽がブランド態度に及ぼす影響」に私は心奪われた。マーケティング研究に関して、全くのド素人である私が見ても、わくわくして思わず読みたくなってしまふような身近なテーマの論文。だからと言って、レベルが低く、内容が薄いわけでは決してなく、しっかりとした実証研究を行い、教授陣からその学術的価値を高く評価され、「商学会賞」を受賞している。「私もこんな論文が書きたい！」素直にそう思った。

卒業エッセイにも書いたが、私は大学で1つの分野を専門的に研究することに憧れていた。だが一方で、たかが2年間で学べるものなんて大したことなく、学者のような論文を執筆して、高い評価を受けることなど私には到底不可能だと思っていた。ところが、小野ゼミとの出会いが「論文で高い評価を受けたい」という私の思いを、実現不可能な夢から、手の届く目標へと変えた。そしてこの時、私は小野ゼミに入って商学会賞を目指すことを心に決めた。



商学会賞へ応募後、応募した同期と自分達へのご褒美にハーゲンダッツのアイスを食べた著者（右端）

かと言って、順調に商学会賞受賞までの道のりを歩んできたわけではない。特に、10月中旬頃、調査の為に各ゼミ生に好みの色を聞いて、一人一人に合わせたサンプルを作る必要があると知った時の衝撃は半端ではなかった。絶対に間に合わないと思った。そして、そこから、この論文執筆で最も苦勞した魔のサンプル作りが始まった…。一日中 Mac と向き合い、シアン、マゼンタ、イエローの数値の微調整を繰り返してサンプルを作る様は、まさしく人間プリンターであ

った。今ではこの作業もいい思い出だが、もう二度と絶対に死んでもやりたくない作業である。

10月になって慌てて執筆を再開するという、計画性の無い自分勝手な進め方にもかかわらず、ご自身の都合を二の次にして熱心に指導して下さい了小野先生には感謝してもしきれない。小野先生は私が商学会賞を目指していることを最初から応援して下さいっていて、前期納会の時には「ももちゃん、商学会賞頑張ろうね。」という言葉をかけて下さった。正直、途中で諦めそうになったこともあったが、「小野先生が応援して下さいている。」ということが励みになり、こうして最後までやり遂げることができた。そして何より、小野先生と、小野ゼミと出会っていなかったら、「論文で高い評価を受けたい」という私の思いは単なる夢で終わっていた。高い評価を受けること、賞を取ることが全てではないが、努力の成果が形として残れば、次の目標へ向かうモチベーションと自信も違ってくる。少し大袈裟かもしれないが、「商学会賞受賞」は、私に、自分が過ごしてきた学生生活に対する自信と誇りを与えてくれた。

最後にこの場を借りて、これまできちんと伝えられていなかった感謝の気持ちを述べたいと思う。論文の方向性や分析に関して相談に乗って下さった大学院生の方々、非常に面倒な調査に協力してくれたゼミ生のみならず、そして、どんな時でも相談に乗って下さり、丁寧なご指導を下さった小野先生。多くの人の支えがあったからこそ、私はこうして目標を達成することができ、自信をもって次に進むことができます。本当にありがとうございました。

p.s. 実は私には大学生活において、小野ゼミと同じくらい熱をいれていた活動がある。それはスキューバダイビングである。ダイビングサークルに所属し、4年間で約200本潜った。実は、商学会賞受賞はそんな私のもう1つの夢を実現させてくれた。東京から船で25時間半。東洋のガラパゴスと呼ばれる小笠原諸島。ここでクジラを見て、ダイビングがしたい！商学会賞で頂いた賞金を資金として、1月31日、東京竹芝桟橋出港の船で小笠原諸島へ向かう予定である。